

月例研究会（2012年6月27日）

Talking Past Each Other: 70~80

年代の原発問題をめぐる労働組合の見解の
分析

鈴木 玲

本報告は、主に1970年代半ばから80年代半ばまでを対象にして、労働組合の原子力発電に関する異なる見解が形成・再生産された背景を、推進派と反対派労組の組合機関紙・刊行物、その他の組合関係資料に基づいて分析した。対象とした組合は、原発推進派に関しては、電力労連（電力総連の前身組織）および傘下組合、原発反対派に関しては原発立地点の総評の地方組織（県評や地区労）およびこれらの組織が動員した抗議行動に積極的に参加した単産である。

分析枠組は、(1) どのような要因が労働組合の原発に対する推進、反対の態度を形成するのか、(2) 原発に対する見解・言説を構成する要素は何かという問題意識に基づき、(1) については、労働組合の体制への統合の程度とイデオロギーに焦点をあて、(2) については、アクターの信念・世界観を類型化した「政治スタイル」という概念を当てはめた。「政治スタイル」とは、当事者の議論のレトリックとそれを正当化する世界観や信念を指し、社会問題を認識・分析・解決するため、あるいは解決策を他の当事者に納得させるための手段として使われ、費用対効果主義（cost-benefiters）、技術至上主義（technological enthusiasts）、倫理主義（moralists）の三類型がある。

原発推進派、反対派の見解・言説の分析は、原発推進派と反対派の労働組合が、それぞれ技術的至上主義+倫理主義、倫理主義+費用対効果主義を組み合わせた政治スタイルをもち、お互いに相容れない信念や世界観から原子力発電をめぐる論争や運動に関与したことを示した。

推進派労組は、とくに1960年代後半、技術至上主義的な立場から原発の技術的将来性、安全性の強調、あるいは反対運動の批判を行った。また、推進派労組は70年代後半以降、日本経済の発展やそれを支えるエネルギー安全保障などの広い文脈に結びつけた倫理主義的な言説（原発推進=正義とする含意をもつ主張）も強調するようになった。反対派による公開ヒアリング阻止闘争についても、倫理主義的立場から批判した。

他方、反対派労組は反原発闘争を反独占資本、反合理化闘争や反核・平和闘争といった広義の政治・経済闘争の一環として位置付けた倫理主義的立場をとった。また、反対派労組は、放射性廃棄物の最終処理問題や電力需要の停滞に注目し、費用対効果主義的視角からも原発の経済性を疑問視した。

このように労働運動内の原発推進派、反対派労組の「世界観」が大きく隔たっていたため、両者が同じ席について論争する場を設けた場合でも、お互いに自らの立場を主張するのみであった（Talking Past Each Other）。すなわち、本報告の分析の含意は、原発問題をめぐる討議民主主義に基づいた対話が可能な「公共圏」を確立することは困難であったことである。

（すずき・あきら 法政大学大原社会問題研究所教授）